

---

# 帰り道

野狐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帰り道

### 【Nコード】

N6023J

### 【作者名】

野狐

### 【あらすじ】

仕事で成功を収めた二宮宗吾は、上司から褒美に貰った休暇を利用して一人旅に出ていた。そんな中、岐阜の山奥の山頂付近で穴場とも言える喫茶店を見つけた宗吾はふらり立ち寄るが・・・決して言うてはいけない、恐怖は足音を立てずに忍び寄っているのだから！果たしてそれは真実なのか？言葉のみが真実を知っている、絶望と希望との狭間を描く作品。

## その一

穴場というのはこういう場所のことを言うのかも知れない、とそう誰もが思うのだろう。その店の中は落ち着いた様子だった。店の入口には「OPEN」の木彫りの看板がユラユラと規則的に揺れていた。高い天井には木製のシーリングファンがゆっくりと回っている。コーヒーの芳しい香りが店内を漂い、窓から差し込む光は店内を柔らかく染めた。宵闇が落ちるまでまだ四時間ほども残っているこの時、一番賑わってもよさそうなこの時間にもかかわらず、店内は嫌と言うほど落ち着いていた。店内にいる人間はといえば窓際のテーブル席に座っている老夫婦が一組と、テーブル一つを開けて鰐広の帽子を深く被り茶色のトレンチを着込んだ男性一人、客はこれだけだった。後はこの店のマスターが一人、カウンターの向こう側で鰐広帽の男のコーヒーを入れてるところだった。

流れている音楽を誰も聴こうとはしなかったし（いやもしかしたら誰もが聴いていたのかもしれない）、それを知っているものもいなかっただろう。今まさに一曲が終わりを告げて、新たな曲の前奏が流れ出した。誰の耳にも流れる音楽は風の流れる音や川の流れる音と同じだった。知らない内に耳に入っている音と。

不意に店のドアの鐘が鈍い音を立てて鳴った。入ってきた新たな客は素早く店内を見渡してから機嫌よさそうにカウンターまで歩いていく。彼は名前を二宮宗吾という。ここに来る前、彼の上司は二宮の肩に手を置いたまま耳元でこう囁いた。

実際今回の雑誌がこんなに売れたのは二宮、お前の書いた記事のお陰なんだからな。少し休みを取っても構わないぞ、一週間ぐらい

どうだ？もちろん休み扱いにはしないさ、ゆっくり休んでくるといい、我らがエース　と。

彼の仕事は雑誌の記者で前述の通り彼は書いた記事の成功で褒美に休みをいただいた、とそういうわけだ。

店の中に差し込む陽の光に木製の羽目板がくすんだ茶色から輝く乳白色に色を変え、店内を幻想的なムードのままに保っている。二宮もまたこの店の中の一種独特な感覚に気づき、息を漏らしていた。時間が経てばこの大きな窓から入る明かりは角度を変えてカウンターの中間を赤色に染め出す。そうしてゆっくりとゆっくりと色をなくしていき、最期には宵闇と忘却とが店の中を包むのだ。

二宮はカウンターの前につくと糸を何重にも巻いて作った人形の付いた車のキーと携帯電話を置いてそれからカウンター席に座った。「いらっしやいませ」マスターは顴広帽の男のコーヒーを持って行く所で、振り返って驚くほど親しみやすい声で二宮に言った。

二宮は少しだけ微笑んで会釈を送ると、それからもう一度店内を見渡して、最期に天井の高いところで回るシーリングファンを見上げた。大きなファンで耳を澄ませば回る音が聞こえてきそうなほどだった。

「家はコーヒーしか置いていないんだが、大丈夫かな？」戻ってきたマスターが言った。

口元に笑みを浮かべて、目尻に深い皺が寄った。その声は穏やかだが抑揚があった。心のカウンセラーだとか歌手だとかが多分そんな声を持っているんだろうと思った。

「後は軽い食事くらいならね、トーストとか、それにサンドウィッチとかね」

「ああ、大丈夫ですよ。コーヒーいただけますか？出来ればミルクがあった方が」二宮はそう返した。

マスターは肩越しに振り向いてうなずいた後で、コーヒーを入れに取りかかった。コーヒーが出てくるまでの間、二宮はマスターがコーヒーを入れるところを片肘について眺めた。その動きは迷うこ

とのない動きで、正解などは知らないものの、どこか習慣的な模範的な動きだとそう思った。薄く毛の生えた手首がしなやかだとそう思った。

この喫茶店は山中の道路沿いに位置していた。名古屋で働く二宮は休みの間のんびりと旅でもしようと考え、彼は自動車を走らせて北へと向かった。岐阜へ入り山間の町や村を抜けていく。高速道路は使わなかった。景色を楽しむためには下道を走るのが一番綺麗だからだ。高速道路のように山を突っ切るのではなく、山や川など自然の地形に沿って進む道。体を休めるには一番だった。彼が走りながら思ったことはガソリンスタンドが少ないということぐらいだ。見つける度にガソリンを入れた。ナビの付いていない彼の車がどこを走っているのかは正確には分からない。山へ入り、どんどん登っていく。左手は急な斜面になっていて、ガードレールの向こう側、下は見えない。道は綺麗だった。二車線の綺麗に舗装された道路にはオレンジ色と白の中央線がどちらもよく目立つ。山側の崖崩れ防止用のコンクリート壁は整然として、自然の山々に取り入って人工と自然との奇妙な取り合わせが実現していた。

この場所は山頂付近であることは何となく分かっている。そして長い緩やかなカーブを向けたところにこの店はあった。切り取ったようにその場所は開いていて、山々を一望することが出来る場所に立つ店。山の向こうは山、その向こうも山、深い緑が続いている。この山間に人々が住んでいるのだと考えると、二宮は少し不思議な気分になった。青い空とのコントラストが綺麗だった。太陽の光が白く光る。息を吸うと、空気には味があるのだ、というどこかで誰かが言ったような言葉がいよいよ現実味を帯びてきて、喜びが顔に浮かんだ。

「はい、お待ちせしました」マスターが言った。

目の前に置かれた黄土色のカップから昇る湯気を見て二宮は店に入って二度目の息を漏らした。

「お一人で旅でもしてるのかい？」とマスター。

「ええ、少し長めの休みができたものですからね。本当に久しぶりに」二宮はそう言いながらカップを回して、コーヒーを口に運んだ。深く苦みのあるコーヒード好きなタイプだった（酸味の強いのはどうも好きにはなれない）。

「そう、有給休暇が何かで？」マスターは続けて尋ねた。

「いや、ちよつと仕事で成功しまして、上司から褒美ですよ」二宮は得意気に答えた。「雑誌の記者をやっているんですけれどね、僕今回はある小説家のことを記事に挙げたんです。知りませんか？九重亮という作家さん、『箱の中をのぞき見る』って作品を書いた人」  
「その作家ならね確か知っているな・・・『日と月』って作品でデビューした人じゃあなかったかな、確か。昔読んだことがあるな」  
マスターは懐かしく遠くを見るように言った。「他は知らないが、私は会社員だったな。そうだ、その本を読んだからだったな・・・」  
「そうですね、その小説家の話です。彼の作品『箱の中をのぞき見る』その作品を取り上げたんです。もちろん九重亮本人も」二宮は言った。

「その作品は知らない」マスターが返す。

「連日テレビでも報道してますよ」二宮は軽い驚きを覚えたように目を開いて言った。「テレビドラマになって今やっている最中だし、それに映画化も決定してる」

「テレビは見ないんだ」

「そうですね・・・」続けて二宮は何かを言おうとしたが口元に軽く親指を当てて言うのを止めた。コーヒードを少しだけ飲んで音を立てないようにカップソーサーに置く。「まあ彼のお陰だっことですよ」

「それでこれからも彼を追っていくわけだ」マスターが挟む。「会社もそれを望んでいるはずだからな」

「いえ、それはないです」

「どうして？」

「彼は死んだからです」二宮が間髪入れず答えた。

マスターは無表情のまま何も言わずに口をつぐんだ。二宮は指を折って数を数えた。

「彼の作品は結局七作だけだったんです。十五年間で。二年に一本のペースで、結局売れたのはデビュー作がまあまあと、それに最期の一本だけ。それでもお金には困っていないようだったし、彼自身も好きなことが書けた、とそう言っていましたし……」

「最期は？」マスターがカウンターに手を置いた。「彼の最期だよ」「ああ、最期は猟銃をこんな風にのどの奥まで突っ込んでですね」「二宮は指を二本立てて銃に似せると口の奥へ入れた。「それからズドン……即死で後頭部が全壊だったそうです。狂気じみていたんですよ、でなければこんなこと出来やしませんよ。奥さんだってそう言っていたんです」

「そうか、そうやって死んでいったか」マスターはしみじみと言った。

突然入口の鐘が鳴り二宮はドアの方を見た。しかし誰の姿もなかった。それからテーブル席の方へ目を向けると、トレンチの鍔広帽の男の姿がなくなっていた。テーブルの上には小銭がきらきらと小さな光を放っている。

「この話はもう止めよう、人の生き死にの話しだ」マスターが言った。

「そうですね」二宮は応じた。

谷間に向かって開いている一番大きな窓に体を向けて、二宮はぼうつと外を眺めた。その景色を見ていると腹の下のところがむず痒くなつて何故かドキドキしてきた。それでも不思議なことに落ち着くのだ。矛盾しているようにも思えるが、そんな感覚だった。店の中には音楽が静かに流れているが二宮には聞こえない。前にもいった通り、流れる音楽は流れる風や川と同じだった。





「しかし気持ちのいいところですね」二宮は何の迷いもなくそう言った。「こういうところへ来ると思うんですけどね、僕はこういう場所で、いやどんな仕事かは分からないですよ。でもこういう場所で仕事をするのが一番向いているんじゃないかって思うんです。都会のまっただ中ではなくてこういう場所で。こういう場所に住み・・・」

「君！」話の途中でマスターが声を荒げて遮った。

二宮は驚きのあまり跳ねるように体を起こして椅子から転げ落ちそうになった。慌てて体を元に戻し、そしてマスターに向き直る。

「君、何を言おうとしたのかは知らないが・・・それ以上は何も言わない方がいい。絶対に」マスターは念を押すように言った。

「どうしたんですか？僕はただこんな所に・・・」

マスターは顔を寄せると、手を口元に当て、唇を震わせた。

「言わない方が君のためなんだ」

自分に向かう視線に二宮ははっと気付く。背中を巨大な毛虫が登っていくような感覚が巡り、冷たい汗が額に浮かんだ。素早く振り返る。その視線の正体は老夫婦のものだった。鋭く色のない目で二人共にじっと見つめている。白内障でも患っているかのような淀んだ灰色。二宮は恐怖を覚えて目を逸らした。

「大丈夫だ、大丈夫だよ、君。言わなかったらそれだけでいいんだ。君は実にツイてる。運がいいんだから」マスターはすでに平静を取り戻したらしく、微笑みながら二宮に話しかけた。深い皺が目尻に

より、二宮はその皺を見るとまた息を漏らした。

強い風がドアをガタガタと揺らした。それに伴って鐘が小さく鳴る。外を風が駆け抜ける低い音が通り過ぎて、また静かになった。

しばらくの沈黙が店の中にあつた。マスターは鍔広帽の男の席を片付けに行き、その間に老夫婦もまた店を後にした。静かになると店の中を流れる音楽は二宮の耳に聞こえだしてきた。何の曲かは分からないがローテンポのジャズか何かだった。マスターは食器を流し台に運び、歌を呟きながら洗い出した。

「あの」沈黙を破つたのは二宮だった。「よかつたらその話し聞かせてもらえないでしょうか？」

洗い物を終え濡れた手をタオルで拭うマスター。彼は二宮へ体を向けると何かを言おうとして口を閉じた。それから手を組んで何も言わなかった。

「絶対に他人へ、その公言はしないと約束します」二宮は両手を膝の上ののせて、背筋をピンと張ってマスターを見た。

「どうしてそんなに聞きたがる？」マスターはやっとの事で口を開いた。

「僕は記者ですから」二宮はそう返事をしたものの、気取った様子で付け加えた。「それに気になるんです。好奇心がこうさせるんですよ。人間ですから」

マスターは呆れた様子できちがいじみた甲高い笑い声を挙げた。

「いやいや、変わっているさ。人は普通は聞きたがるうとしないものだがね。こんな恐ろしい話・・・それでも聞きたいのか？」

「はい」

マスターはカウンター越しに二宮の目を真っ直ぐ覗き込んだ。そして観念した様子で目を閉じた。

「話を聞くまで帰る気はないって目だな、仕方ない・・・君、堅くせずに楽にしなよ」

二宮は体勢を崩してカウンターテーブルに乗りだした。それから残っていたコーヒーを半分くらい飲み干し息を整える。聞く態勢は

万全だった。

「この話はね私自身の話なんだ」マスターは座りながら言った。「私の話、信じるとか信じないとかそんなことはどうだっていいんだ。もし君が聞くのであれば話すし、もう止めて欲しいのであれば止めるかも知れないね。つまりこの話は壁に付いた煙草のシミみたいなものなんだよ。気がついたときにはもう遅くて、もうそれを消すことなんて出来ないのさ」

神妙な面持ちで二宮は了解した。

「もしかしたらね、私も彼のように、何という作品だったかな？アレを書いて自殺した作家のことだが・・・」

「九重亮」二宮が繋いだ。「彼の遺作は『箱の中をのぞき見る』です」

「そう彼だ。彼のように自殺をしていたかも知れない。ただしのに銃を突っ込んで撃つなんて言う馬鹿げたことは出来ないから・・・だって悲惨だろう？脳漿が飛び散るかも知れないし。悲惨だ。うん、つまりもっと他の方法でだね。だが私はしなかった。もちろんこれからもするつもりもないが、私を救ったのは幸か不幸かここから見えるこの景色だった」

マスターは遠い目で窓の外に広がる景色を眺めた。恩人に感謝するような、長い間連れ添ったパートナーを見るような、そんな目で「自殺するのは最もナンセンスなことだとは思わないか？人は狂気に駆られ、しばらくして憔悴しきると最期に自殺してしまうんだろ？私にはどうにもこうにも分からない。ドイツのね哲学者ショーペン・ハウアーって知ってるかな？」マスターは訊いた。

「いいえ」二宮が答える。

「彼の言葉でね、彼が『自殺のもたらす個体の死は解脱ではない』と言っている通り、死んだって何の解決にもならないんだ。まあ自殺の話はいいね」咳払いをして、マスターが続ける。「この頃、私は会社を辞めたところだった。脱サラといえいいのか？だがその後のことは何も考えていなくてね、無職でどうにもならない日

々を送って旅をしていたんだ」

「僕のように？」二宮が言った。

「境遇は違うよ。ははっ。煙草を吸ってもいいかな？お客さんがあるときには吸わないことにしているんだが、長話になりそうなんですね」

「ええどうぞ」

マスターは「ありがとう」と言いながら煙草を取りに立ち上がった。そしてつま先立ちで手を伸ばして、キッチンの上の棚から煙草の箱を取り出すと、続いて新しいコーヒーを一杯用意して戻ってきた。

「それはもう冷めているだろう？新しいやつをやるといい」

マスターは先ほどのカップを脇に押しやると新しい熱い一杯を二宮の前へ押し出した。強い香りが漂って来るのを二宮は飲み込んだ。二宮の頭の中は話を聞くことで一杯だった。二宮は興味を持ったこととことんのめり込む性格である。前の自殺した小説家の時もそうだった。興味からの取材でこうなった。小学生の頃、小学生のものとは思えないほどの立派な帆船模型を夏休みの工作で作ったときも、終わりのないパズルゲームをやり始めたときもそうだった。やり終えた後はどっと疲れが押し寄せてきて、やらなければよかったという感情にやり玉にされるのはいつものことだ。今はマスターの話を聞くことしか頭にない。

マスターは箱から煙草を一本取り出して、ポケットからライターを出すと火を付けて煙を吐いた。そして話しを始めた。

「先にも言ったね？これが私自身の話だと。つまり思い出みたいなものなんだ。思い出ってその表現が正しいのかは私は知らないよ、ただ私はこの出来事をよく覚えている。誰しも興味があることだったりすると嫌でも覚えていくだろう？好きなアニメの主人公のセリフばかり、好きだった女の子とのフォークダンスばかりだ。ただしそれらは脚色されていくらか綺麗なものになっているだろうけれどね。ははっ。それにね、好きなことばかりじゃあない、恐ろしかっ

た思い出だつて心に残ることはあるよ。こいつはよりやつかいでね」  
そついうとマスターは心臓の辺りを手で押さえた。「こいつはここ  
の一番深いところにね、根を下ろすんだ。それに蔦を絡ませてくる。  
皆が忘れようとするけれどね、こいつは忘れられない。まあ忘れら  
れないって点では好きだったものの美しい思い出と、恐ろしかった  
ものの暗い思い出は同じようなものだから・・・」

「どちらも心臓が高鳴るってことですね？耳鳴りみたいにバクバク  
なつて、あれは思い出が心臓に根を下ろす瞬間だったってことです  
二宮が口を挟んだ「そつでしよう？」

「そついうことになるのかもね」

二宮はマスターを見てはつとした。大きな二重の瞳は話し相手の  
二宮ではなくずつと先の方を見ていた。目の下には深い皺が乾燥し  
た砂の地表のように走っている。いくらか白髪之交じった頭髪、煙  
草を挟んだ指の間には茶色い染みが出来ていて、それが煙草のヤニ  
によるものであることはすぐに分かった。堅く皮の張った指、恐竜  
の肌のように堅くざらざらしている。しかしながらそれ以上にずつ  
と若く見えるのは、マスターが歳をとっているというよりは、まだ  
まだ現役の男、自分くらいの年齢にしか見えないのは、多分この山  
の澄んだ環境のお陰であるのだと二宮は思った。そしてこんな場所  
に住んでいたら誰でもそつなるものなのだろうとも思った（都会の  
喧騒も、人間関係から発生する嫉妬や憎悪などもストレスも何もな  
いよつな場所だから）。

### その三

「私は当時ある広告代理店に勤めていてね、今の君よりも少し若いくらいだと思う。当時の私は三十一歳だった。自慢じゃあないが私も結構仕事は出来る方だったんだよ。上司にも気に入られていたしね。昇進もすぐだって言われていた。だけれど私はそんなことには興味はなかったんだ。私にはやりたいことがあったからね」

「それは何ですか？」

「バイクだよ。バイクでね世界中を走り回りたいかったんだ。走らなくなったバイクが裏に止めてある」そう言ってマスターはカウンターテーブルの向こうの裏口への扉を親指で指した。「あいつで走り回りたいかったんだ」

「男のロマンって奴ですね？」二宮は挟んだ。そして破願した。

「ロマンに夢ね。そんな崇高な言葉を使ったら怒られるかも知れないけれど確かにそうするということが、その目標が私の全てだった。会社の上司もそれは知っていたからね、無理に私を止めようなんてことはしなかった。私はお金がある程度たまったら会社を辞めたんだ。取りあえずは日本中を走り回ることにした。400ccのバイクの荷台には少しの荷物と丸まった地図、それにカバーのない本が一冊だけ入っていた。この本が『日と月』だよ。さっき思い出したんだが。」

あの本は私を一步前へ押し出してくれたという点に関しては最大の功績を持った本だよ。栄誉賞をあげたっていい。ただ全員が全員あの本の内容によって押し出されるとは限らないね。中には糞だと

けなす奴だっているに違いないだろうしね。あの本が実は編集社宛に送られていたものだとは知ったときは私はどきつとしたよ。実際編集社に送ったって殆どの作品は読まれないっていうじゃないか。一体どれくらいの資源が紙となって、そして嫌というほどに文字を書きたくられて、そして棄てられていくんだろっね。あの本だって封筒に入ったままゴミ箱の中へ捨てられたって可笑しくはなかった。だがそうはされなかった。彼は編集社宛に送ったのではなく編集者宛に送ったそうだね。自分の所に小包が届いた。だから貰った人はそれを開けた。確かに当たり前の構図だよ」

「そうして？」

「うん、そうして私はバイクでの旅に向かったんだ」マスターはうなずいた。「まず始めに私は日本の東側を旅しようと思った。そうして静岡から太平洋に沿って東へ進んだんだ。一番の苦労はガソリンだったね。私はおっちょこちょいなのかよくガソリンを入れるのを忘れるんだ。ガソリンスタンドも何も閉まっちゃってね。朝までスタンドの前で野宿なんてのは珍しくはないよ」

「今みたいに24時間のセルフスタンドは少なかったですからね」  
二宮は笑った。

「24時間のスタンドが今はあるのかい？そんなものが当時あったら苦労はしなかったね。私は北へと向かって北海道にも入った。ここでは滑稽な話があるんだが聞いてくれるかい？北海道で稚内に入ったときのことだよ。あそこはね実にロシア人が多い町だった。看板なんかロシア語で書かれているのが目立っていたし、町の人ももそれには慣れた感じだった。私には人から聞いていて確かめたいことがあったんだ。何でもロシアの人たちは自分専用のワサビを持っていて食堂なんかでパンに塗って食べるんだと。信じられるかい？ワサビをだよ？私自身の中ではワサビはご飯に合わせるものだからね、信じられなかった。私たちがピロシキにマヨネーズでも塗って食べたらロシア人は同じような反応をするかも知れん。うん、そして私は確かめようとしたんだがなかなかその現場には八チあわ

なかった。私がそろそろ稚内を後にしようとしたときだ、最期に昼食でも思っ入った食堂でね、入った目の前にいた外国人の男がね、おもむろにワサビを取り出すとそれを食パンに塗りだしたんだよ。そしてパクリ。私は立ったままその男を見ていたから、その男も口を動かしながら私の顔を変なものでも見るようにじっと見ていたっけな」

言い終わって一呼吸置いた後、マスターは突然思い出したように笑い出した。二宮もそんなマスターを見て笑った。

「へえ、一度試す価値はありそうですね。ははっ。それからまた南へ向かったんですか？」と二宮。

「そうだ。今度は日本海側を通ってだが、ずっと、ゆっくり二週間ぐらい掛けて南へ向かった。新潟を越えた当たりで一度戻ろうと思っつてね、東側の旅を終えようと思っつて岐阜へ入り南へと走らせた。

この場所はね、この喫茶店はそのときに見つけた所なんだ。トンネルを抜けてカーブを曲がったすぐの所にこの場所があつて、私はすぐに駐車スペースへとバイクを乗り入れた。店には入らずにしばらくは景色を眺めていたよ。春先のことだった。山はどこも緑色だった。風が吹いて木々がざわざわと音を立てて揺れていた。緑色の中にいくつか桜の木が混じっているところもあった。そこだけは薄い桃色が周りのせいで一際目立っていてね綺麗だったよ。空には雲があつたにはあつたが晴れていて気持ちの良い日だったのを覚えている。そうして私は中に入った・・・」

一度話しを止めて煙草をぶかぶかと吹かした。白い煙が立ち上つて消えた。マスターはその煙の中に何かを見ているのか？二宮は咄嗟にそう思った。何せマスターは煙を目で追いかけてそれが姿を消すと少し沈んだ目で眺めているからだ。その瞳が水晶玉のようだと二宮は思った。それに幼い頃に友達と交換したり転がしたり覗き込んだり、それに並べてうっとりとしてみたりした安っぽいガラスのビー玉のことを思い出した。あれらはまだ実家の、勉強机の一番上にバンドエイドの空き缶に入っつて残っているのだろう。そう思っ



た。

二宮はマスターが一本を吸い終わり、新たな一本に火を灯すのを、コーヒーを飲みながらゆっくりと眺めていた。マスターのしわがれた手の中で炎が優しくオレンジ色に燃え、煙草の先を焦がす。

「話を続けようか」とマスター。「店の中には小さくジャズが流れていてね、知らない曲だが好きな感じだった。あるだろう？CMやラジオ何かで知らない外国の音楽が流れていたとき“あつ、この音楽なんて曲だろう、気持ちのいい曲だ”って感じる事が。その音楽は私にとってのそれだった。音楽に限らない。絵画だったり彫像だったり映画だったり、この景色だったり、それに九重亮のあの小説であつても人間は何かしら心の中にボタンがあつて、それを押すことが出来る瞬間というのは、そういうものに出会った瞬間だと私は思っている。つまるところ、その瞬間に巡り会えたときにこそ自分がどうしたいのか、それに気付けるのだとね、思っているんだ。君が物事に異常な興味を示す瞬間も同じような類のことだと思うよ。さて、私がこの喫茶店に入ったときに客は私を入れて四人だった。老夫婦が一組とトレンチコートに鍔広帽を被った男、男というのは体格で判断したんだ。顔はよく見えなかった。そして私。後は私を向かえ入れてくれたマスターが一人だった」

話しが一瞬止まって、二宮はこの瞬間にはつとした。突然にあふれ出した感情は疑問と驚き、それに恐怖が五対三対二位の割合だった。おかしいのだ。マスターの話は一体いつのことだろうか。話しに沿って考えればそれは二十年位前か、もう少し前の話しということになる。しかしその時代にはこの場所はもうあつた。いやこの喫茶店があることは大して問題ではない。江戸時代から何百年も続く酒蔵や和菓子の店だつてあるくらいだ。息の長い喫茶店があつても決して変ではないのだ。しかしマスターの話に出てきた客の人物、老夫婦とそれにトレンチコートに鍔広帽の男……。これは紛れもなく自分がこの喫茶店を訪れたときに客として今自分が飲んでいるものと同じコーヒーを飲んでいた人たちそのものではないのか？

二宮は慌ててマスターにそのことについて聞こうとした。しかし聞けなかった。マスターの目は水晶玉から黒真珠のような懨然としたものへ変わっていたのだ。それはもう質問は受け付けないと言った風だった。ここから先の話しは自分のみで進めさせてもらおうと言ったように表情を変えていた。

「君と同じさ。君と同じようにこのカウンターテーブルへ座ってコーヒーを注文した。私の場合はミルクを少量入れたがね。それを半分位飲んであそこのね、大きなガラス窓から下の景色を見下ろした。そしてあのセリフを言ってしまった。『こんな所に住めた・・・』というあのセリフを」

「そのセリフには何か意味があった？」二宮は乗り出した。

「ああ、あったとも。大いにね。あの言葉を言っただけで店の中の空気が変わったのが分かったんだ。擦れているというか重くなっているというか、それはすぐに理解できたよ。何かしら自分がしてしまったということが」マスターは立ち上がって自分用にソーダ水を一杯入れた。それからレモンを縛り一口飲んだ。「老夫婦の目が私の方を向いていてね、それは恐ろしかった。白く光っているように瞬きもせず私を見ていて、昔の映画に『光る目』っていうやつがあつてね、子供たちは皆白銀の髪に光る目を持っていて、村人たちが次々に死んでいくんだ。その子供たちの目に似ていた。髪も丁度白髪だったし。アレはね、パニックホラーというよりは精神面での恐怖が強かったが、そう、静かな恐怖だね。うん、それにトレンチの男は突然立ち上がって店を出て行ってしまったよ。テーブルの上には代金が輝いていた」

二宮はゴクリと唾を飲み込んで、それからうなずいた。

「戸惑いながら席に戻った私の元へマスターがゆっくりとやって来た。そしてこう言った。『お客さんあんた今なんて言ったんだ？』と。その声は囁かれていて震えていた。瞳孔が開かんばかりだったし息も絶え絶えでね。私は普通に答えたよ。『こんな場所に住めたらいいなってそう言ったけど・・・何かおかしいことかい？』マスター

「は怒りに震えたような声で、いや、今になって考えると絶望の声だったのかも知れない。つまりそんな声で“あんたあ滅多なことは言うものじゃあない。あんたはもう帰れない、お終いだ”と言った。言葉は全部覚えてるよ。あんなに鬼気迫ったセリフは初めてだったから」

「それから？」

「ここからが本題だよ」マスターは席に戻りソーダ水を口に含むと、目を閉じてそれをゆっくりと飲み込んだ。「ここからが話しの本題だ。不思議で恐ろしい出来事の始まりだ」

## その四

マスターは話し出す前に煙草を一本取り出して火を付けた。それから気がついたように煙草を二宮に差し出した。しかし二宮は丁重に断った。

「僕は吸わないですよ。すみません」

「ははっ、そうか、それがいいよ。私もねいつかは禁煙しようと考えているんだ。いつになるだろうね。でもね、私は禁煙できるという自身があるんだ。所詮禁煙なんて言うものはその人の気持ち次第さ。それが最も単純で至極重要なことなんだよ。何事もそうさ、大切なことはまず思うことだから。

すまないね。

本題を話そう。不思議と恐怖が付きまとう話しはここからだ。

私はマスターの顔を見ようとしたがマスターの顔は青ざめていてね、額には玉のような脂汗が浮かんでいるのが一目で分かった。でも彼はいくらかは落ち着いた様子で瞬きを繰り返しながら必死に深呼吸していたよ。事情を聞こうとはしなかった。静かな恐怖が迫っていることだけは肌で感じたんだ」

「光る目？」二宮が呟く。

「その通り。直接的ではなくて忍び寄るタイプの、最も恐ろしいものだったのかも知れない。いや、恐ろしいものなのかな？実際はそれを望んだものに訪れる出来事なのに？不思議ではあるし、非科学的ではあるけれど、まあ人が考えられる範疇を越えた出来事はやはり恐ろしさは付きまとうのだろうね。

マスターは少し疲れた声で私に“代金はいらぬ”と言ったけれど、私にはその言葉すら理解する余裕はなかった。正直パニツクに陥っていてね、あの奇妙な空気に。外見は正常だったかも知れないけれど、どうしていいか分からなかった。早くにこの場所から立ち去ろう。それだけを考えていたんだ。私はカウンターのの上に代金を適当に置いた。足りていたかは知らないがポケットにあつた小銭は全部置いたよ。そして店から飛び出した。出る寸前に振り返って老夫婦を見たが、彼らもやはり私のことを見続けていた。私の目が狂っていなければ二人共口元には薄ら笑いを浮かべていたね。ちなみに私の視力は二・〇だよ。目は銀色に光っていて、あれは人間のもの何かじゃあないって確信した。人間なのは見た目だけで、もっと別の生き物だと。幼い頃私は犬を飼っていたがね、バーニーズマウンテンドッグというやつだ。お腹の白い毛が綺麗で名前はバジルとあった。知ってるかい？バジルの花は白いんだ。交通事故にあつて死んだんだが、最期にね、死ぬ寸前のバジルの目が、丁度あの老夫婦のものに似ていたと思う”

二宮は老夫婦の座っていたテーブル席に目をやった。さっきまで日の差していた席はもうすでに陰っている。それから二人が座っているところを思い浮かべてみた。銀色の髪、光る目、そして口元の微笑。それらを思い浮かべると二宮は体を震わせて向き直った。

「私は外に出てみたが別段変わった様子なんてなかったんだ。いや細かく言わせてもらえばね、太陽が大きな雲に隠れて何というか、世界全体に薄いフィルムでも張ったみたいないな感じがしたのを覚えてる。それに強い風が吹いていた。バイクの所まで行くとその風はさらに強くなって私はバイクが倒れないように必死に支えた。山全体が騒ぎ出して、私に何かを話しかけているようだった。木々、花々それぞれが自分の言葉で。風が最高潮に達したとき、駆け抜けるように風がぴたりと止んだ。そしてその風は尾根を下るようにざわめく木々を伴って降りていったよ。雲も晴れて太陽も顔を出した。空の一番高いところに鳶かな、鳥が飛んでいるのも確かに見えたり、

それはいい天気だった。私はほつと胸を撫で降ろして、バイクのエンジンを掛け、その喫茶店を後にした」

「で、恐怖というのはそのことですか？」二宮は座り直した。

「慌てなさんな、君。慌てるという行動は勿体ない行動だよ。実際本当は見えてるものでも慌てて見えなくなってしまうことだってあるのだから。ただ慌てたからといって、あの言葉は言わないでくれよ。何度だって言うが君はツいているんだから。無駄にしないことを約束してくれよ」マスターはそう言って二宮の顔を確認するとニヤリと笑った。「で、私はバイクを発進させて、もと来た道に戻った。何故先に進まなかったかというと、来た道の方が安心だったからさ。先に進むというのは知らない道に行くということだろう？そつする勇気が私にはなかった。私もやはりびびっていたからね」

二宮は苦笑いで顔を振り同意した。

「ちよつと話は逸れるが私がバイクの旅に出る前最期の二週間、会社を辞めてからの話したが、生活のリズムは完璧なものだったと自負するよ。朝は六時に起床すると天気予報を見て天気を確認した。それから外に出て、空気の匂いをかぎながら散歩をした。しつかり三十分歩いた後には朝食をとって、その後午前中は洗濯なんかの家事と、それに読書をして過ごした。昼食の後は街に出てぶらぶらするんだが目的は様々だった。地図探しに・・・次に読む本を探したりでね。映画を見たりもしたよ。もちろん一人だ。夜は早めの晩ご飯をとる。時間はきっちり六時にしていた。そしてすっかり暗くなると地図や雑誌の写真を眺めながら、これから自分がどういうところに行くのかということ想像して時間をつぶす・・・そして九時には眠る。コンディションを整えることが大切だと思っていたからね、長旅には重要なことだと信じていたよ。これもあの『日と月』って本の影響さ。

さあ。

で、私はバイクを走らせて道に戻った。ついさっき、喫茶店に入る寸前に通ってきたトンネル。そのトンネルへ入ったんだ。薄いオ

レンジ色の灯りが行進するみたいに繋がっていて、その下を通り、トンネルを抜けた。トンネルの向こうはカーブがあつて、その先にあつたのは・・・この喫茶店だつた」

「えっ？なんですって？」二宮は声を上げた。

「そう、奇妙だろう？後にしたはずの喫茶店、この店が目の前に突如現れたんだよ」

二宮が訝しげな表情で話しを整理しにかかっているのを尻目に、マスターは落ち着いた表情でのんびりと煙草を吹かして、軽い咳をした後にソーダ水を飲んだ。二宮の鼻に煙草の匂いがまとわりついて、そして消えた。

「過ぎ去っていった物が突然目の前に現れる。簡単には言えるけれど、実際にそいつを目の前でやられたら殆どの人間はパニックに陥るのだろうと思うよ。私かね、まあかるうじてだが平静を保ち続けられたのはきつと自分自身新しい土地へ行ったり、新しい物と出会ったり・・・そういう物が好きだつたからじゃあないかと思う。そうか気が狂ってしまったか、はははっ」マスターは鼻の上の当たりを手の甲でこすつた。「喫茶店が目の前に現れた。私はもしかしたら同じような喫茶店が、私が見落としただけで元々からあつたのではないかと思った。それで先ほどでた喫茶店のことを思い起こして新たに目の前に現れた喫茶店との違いをあれこれ考えてみたんだ。さっきの店の屋根は鮮やかな赤色だつたんじゃあないか、今度の店は少しくすんでいるぞ、だとか店の外には紫の花が植えてあつたはずだ、だとかつてね。私は私の横の通り過ぎてゆく新たな、もう一つの喫茶店を見て考えを巡らした。そうして後にして、またトンネルへと入つていった・・・この先はもう分かるだろう？」

「トンネルを抜けると・・・そこにはまた同じ景色が広がっていた」二宮は素早く反応した。

「その通りだね。三度目の正直さ。もう疑いようのないもので、朱色の屋根だつて深紅の屋根だつて、違いなんてない。私が無理矢理そう思っていただけ、視点を変えようとしただけだ。狂ってしまった

たと思ったよ。自分は一体何をしようとしているんだろう。早く帰って次は日本の西側を攻めてやるんじゃないかな？ 同じ所をぐるぐる回っている場合じゃあないだろう？ 先へ進めばいいんじゃないかな？ そう、トンネルの先へ……。私は道路の真ん中でね、大きくUターンをした。対抗車なんて来る気配はなかった。むしろ来た方が気持ちのいいぐらいのものだ。周りから音がしなくなっていてね、いつの間にか耳の後ろを油みたいなのっぺりしたものが伝っていったよ」

マスターはここで二宮のために空中を指で辿って見せた。同じ所でぐるぐる指を回して見せて、途中でぴたりと止めると次は逆に回し始めた。その動作はマスターのそのときの精神状態を表しているのか、バイクの辿ったルートを表しているのか、二宮には判断できなかったが、どちらにしてもそのときのマスターは体から魂が体外へ遊離し彷徨っている状態で、冷静さは逆に放心状態へと繋がる前兆であったことを二宮は勘ぐって心配になっていた。

「戻れなかったんですね？」二宮は“ですね？”と変な所を強調しながら言った。



## その五

「そうなんだ。その通りで戻った先の景色は・・・」マスターはその後に続く言葉を二宮のコーヒークップから立ち上る芳しい湯気に任せた。「私は喫茶店の駐車スペースにバイクを止めた。太陽はいくらか陰ってしまっていたが、それでも暑かった。息は切れていたし目は乾いていたし、喉も。それに指先が異常にジンジンと疼いた」手を顔の高さまで上げて閉じたり開いたりしてみせる。「私は喫茶店に駆け寄ってドアを開こうとしたが鍵が掛かっかけていて開かない。窓にべったり額を押しつけて中を覗き込んでみたが照明はどれも消えていてね、初老のマスターの姿はなかった。ただ天井の高いところでファンがゆっくり回っていたな。」

私の考えていたことなんてくだらないことだよ。私は喫茶店を壁沿いに中を覗き込みながら、今日が何曜日だっただろうと思っていた。金曜日だったか土曜日だったか、どちらかだったよ。今日中には自分の家へ帰るつもりだったんだから、ゆっくりと眠るつもりなんだ。週末には家でゆっくりする。私はこれだけは心がけていた。自分のベッドでね、慈悲深い神に見守られて私は眠る。それがどうした？私はさっぱり考えようと動かなくなった自分の頭を無理に動かそうとして頭痛が始まったんだ。吐き気がして・・・どんな態度をとってこの状況を理解したらいいのか・・・今話していることも支離滅裂になっっていないかい？大丈夫？」

「ええ、平気ですよ」二宮は笑って見せた。しかしマスターが少なからず興奮していることは感じていた。手元の煙草は茶色くくすん

だ指の間、その寸前まで燃えていたのだから。

「お腹が空いたね、何か食べたい気分だが、ソーセージか何かを食べたいな。それにライ麦パンが食べたいな。私は昔から好きなんだ、ライ麦パン。お腹は空いていない？」

「僕は・・・あまり」考えるそぶりをしてみせる。

「じゃあ止めておこう」マスターは気がついたように煙草をもみ消して、灰皿の中へ置き捨てる。両手の指を組んで向き直った。「私はねどこかへ行かなければならなかったんだ。ずるずると自分の細い精神にぶら下がっていてね、かろうじての私の冷静さは、自身が置かれた状況を理解できていなかったことにあるんだね、きつと

さて、店の裏口へ回ると店の扉があるだけの殺風景なところだったが、私はそこで一つの光明を見つけたよ。森の中へ降りていく細い道があるんだ。左右から高い草が押し寄せてはいたが、それでも確かに道は続いている。ここは山の頂上なんだから当然下へ向かえばここから抜け出せる・・・私はその道の先を、目がどうにかなるんじゃないか、と思うくらいに見つめた。その道の先を透過して見据えるくらいに。

私は小さな声で何かを呟いていた。「明日はどうしよう」「眠たくなってきたな」何でもないことをね。想像を巡らせていた。余裕を持って口笛を吹き鳴らしながら歩いたり、お気に入りの歌を口ずさみながらバイクを走らせる自分の姿。同時にそれは自分の明日の姿だった。現状に留まることなんてそんなつまらない人生はないね。「夢を諦めた人間は死んでいるのと同じだ」だったかな？夢なんて言葉を使わなくなっただけいい。でも明日を考えられなくなったら、それはつまらないね。明日のことで笑ったり、くすりとやったり、それにドキドキしたりそれこそが楽しさだし生きてることだ。自殺する人間はそれを失った人間、辛さに負けて・・・」

二宮はパソコンのことについて考えていた。少し前にインターネットのブログで“パソコンを打つことについて”の話を読んだ。偶然訪れたそのブログは自分と同じぐらいの歳の男性が経営している

ブログで、本人のハンドルネームはコラーダといった。コラーダとは中世スペインの英雄、騎士エル・シードが持っていた剣の名前だ。コラーダはキーボードを叩いているときに幸せを感じるという。素早くキーボードを叩いて文字を打ち込みスペースキーで変換する。一番最後にエンターキーを押して文章が完成したときに小さな至福を感じるのだと綴っていた。彼はエンターキーを力強くパシツと打ち込むらしい。そうすることで文字に魂が宿るのを感じるのだと。

コラーダとマスター、二人とも同じだと二宮は思った。いや、全ての人が同じなのかも知れないとも思った。何か小さな幸せ、それにぶら下がって確実に生きている。

二宮は床を見下ろして足下から窓まで視線を運んだ。細い染みか傷が一本繋がっていた。

「私は草をかき分けて一歩だけその道へ踏み込んだ。空は明るい晴れた日、だがその道は暗く冷たかった。地面には細い枝や石が転がっていて何度も何度も足を取られてしまった。冷たい風は私の脇の下や首筋を通り抜けていく。汗をかいていたからね、余計に冷たく感じたよ。どこに繋がっているか何て分からないけれど、少なくともこの道は私の希望だったのね。慎重に一歩一歩進んで、一際分厚い草の扉を押し開けた。両開きのその扉の先は今までよりもずっと広い場所だね、それまではどこからか鳥の声や自然の音といふのかな？聞こえていたんだ。それが聞こえなくなった。静かな場所だった。神秘的だね。大昔の人はこういう場所のことをきつと聖地だとか祭壇だとか・・・そんな風に言っただらうね。屋久島は行ったことはあるかい？」

「いえ、ないですね」首を振る二宮。「あなたは？」

「私もないよ。しかしパンフレットや雑誌、写真集なんかでは見たことはある。いつかは行きたいと思っていた場所だ。今だにないが」マスターは薄暗い空気を吸い込んだ。「足下に注意して一番近くの木に触れた。冷たい。見渡すと広くなったところの中央に水が溜まっっていて、薄暗い周りの景色が映っていた。よく見ると小さな虫が

飛んでいるんだ。ゆっくりと漂うように飛んでいる。見たこともないような虫だった。一匹や二匹じゃあない。気づけば数十匹、数百匹に増えているんだ。僅かに高い木の隙間から光が漏れていて、その虫たちは反射するように飛んでいる」マスターは空中に見えないその虫たちを追っていた。「私は緊張と暑さから息を切らしているね、その場に座り込んだ。地面は濡れていてジーンズを通して水が染みこんできたが気にはならなかった。それでもまだ明日は何をしようかと考えていた。」

「そこには何があったんです？」二宮は踏み込むように言った。細く、強く、それは観察するような目だった。

「どうしてそう思うのかな？」マスターが返す。

「分かりません・・・ただ、何となくですね」二宮は濁らせた。

「それは元記者の勘なのかな？だとしたら君は記者としては一流だろうね。うん、そうだ。そこに現れたものは・・・想像もつかないものばかりだったよ。広場の中に石が綺麗に並んでいる場所を見つけた。多分偶然に並んだものだと思う。サークル状に。その中央には草が人間の顔みたいに咲いていた。その顔はまるで小さな男の子が笑っているようで、私は見とれていたよ。私は自分自身に“何とかなるさ”とそう話しかけてはいたけれど、どうしたらいいか何て分からなかった。正直帰れる気はしなかった。だが帰るつもりではいた」

「恐怖心は？」

「恐怖？なくはなかった。前にも言ったとおり忍び寄るタイプの恐怖だった。直接的ではないんだ。ジェイソンだとかエイリアンだとか、誰かが殺しにやってくるようなものではなかったし、ただ太陽の光が弱くなっている、そう気づいたときは恐怖だった。太陽の光は希望の象徴、それが強くなったり弱くなったりすることはその下でそれが必要とするものの心理状態を表すって、そう言っても言いすぎだとは思わない。その光が弱くなっていたんだ。飛んでいた羽虫たちから光が消え、私の心に恐怖を植え付ける。そして彼らが

現れた」神経質な笑いを浮かべ、マスターは意味深に言った。

「彼ら？」

「彼らだ」マスターは一拍おいて続ける。「このことを小説にでも書いてみようかな？少なくとも見積もっても原稿用紙二百枚は越えるだろうね。それに置かれた状況に疑問を抱いたとしても・・・まあ聞いてくれ。」

恐ろしいことだよ。見上げたところに大きな岩があつてね、苔むして木の根が走る岩だ。その上に彼らは現れた。現れたのは二頭の鹿だった。のそりのそりと現れて、二頭して私を見下ろすんだ。私はその鹿の顔に見覚えがあつてね、彼らを覚えていたよ。彼らの銀色に光る目は喫茶店にいた二人の老人たちのものだった。片方の顎から下がった立派な銀色の髭がゆっくりと下へ下がったと思うと、二頭して私に微笑みかけるんだ。口の両端を持ち上げて、その大きな目玉を私に向ける。小さな声だが彼らが言うことは聞こえていた。「深い緑、そよぐ風、端に立てば皆空を飛び、夕闇を持って眠る。優しいものに包まれる、ここは優しい良い所だよ」何度もこの言葉を繰り返していた。私は何も言えないでいた。そこに座るばかりだね」

二宮はマスターの目をじっと見つめたままでいると、大きくうなづいて見せた。

「私は自信が狂乱したり、精神異常を引き起こしたり、言わば正常な思考が出来なくなれば、それには気が付けるつもりでいる。だからこそ言えるがこれは事実なんだよ。」

さあ、続きだね。二頭の鹿はその大きな岩から小さな岩へと飛び移って下へ降りてきた。ちょうど鼻に苔の緑臭さがまとわりついていて離れないだけ、私には逃げることは出来なかった。疲れていたし・・・それにどうすればいいか分からなかったしね。そいつらを見ていたらふいに、僅かに残った太陽の光、それまで私の頭の左側をずっと照らし続けていたんだが、そいつが突然に遮られた。二頭の鹿が驚いたように立ち止まって、こちらを警戒し始めている様子

がすぐに理解できたよ。どうしたんだろう？そう考える前に私はそつと顔を上げて見上げてみると、そこに立っていたのは鍔広帽を被つたトレンチコートのあいつだったんだ。いや、あいつなんて言つては失礼に値するな。あの人、あの方だ。当人がどう思つていたかは分からないが、私は彼のお陰で助かつたのは事実なんだから」

「助けられたと？」

「ああ、そういうこと」そう言つてマスターは人差し指を立てた。

「見上げた彼の顔は陰つていてしつかりとは見えなかつたけれど、鹿たちが怯えていることは容易に理解できたし、何しろ鹿たちの顔と言つたらね、あれ知つているかい？トムとジェリーでジェリーの罾にはまつたトムの驚いた表情。舌なんか飲み込んでしまつて、体中の骨が後ずさりするみたいに体を後ろに引つ張るんだ。毛は逆立つてるし、目玉はゴルフボールみたいに真ん丸でぐるぐるしてる。状況が状況だったが、違つていたら私はがさつな女みたいな笑い声を上げていたかも知れないな。ある本の言葉を借りて言うのならばこれこそがまさに“気が触れた人間の歓喜”というやつだよ」

「日と月」そう言つて二宮は破顔した。

## その六

「そうなんだ。この本でも言っていたが、その時は周りの人間にとつては、その手のものは冗談にしか見えないらしい。女性がたまに発するあの狂気じみた笑い声は特有のものなのだろうね。そいつが“気の触れた人間の歓喜”に思えてくるんだ。私はその一歩手前で笑うこともなく鹿たちが怯えている姿を眺めていた。

鹿たちは少しだけ抵抗するように踏みとどまってはいたけれど、次第にその表情からは余裕は消えた。そしてもの悔しそうに背を向けると森の奥へ跳ぶように消えていった。

ほっとした私は態勢を変えようと地面に手をついた。すると手の平に小さいけれど鋭い痛みが走った。多分剥き出していた岩か、植物の棘か何かだったと思う。手を返してみるとそこに一ミリくらいの大きさの血がガラス玉みたいに浮かんできたんだ。その朱色が周りの色とのミスマッチで嫌に鮮やかに見えて、今思えばそれこそが冷静さを取り戻すきっかけだったのかも知れないな。私ははつとトレンチの男の方を見ようとした。それはあの鹿たちを追っ払ってくれたことへの感謝もあったし、彼が何者かということも知りたかったしね。もちろん自分自身を安心させるために、そのことに従事して勤めたさ」

「しかしそうもいかなかったんですね？」

「ふふっそうなんだ。いやこうしてその当ても笑えたらどんなによかっただろうか。トレンチの男は私を見下ろして、ゆっくりと身をかがめて近づいてきた。私の誤算はトレンチの男が映画“アンタ

ツチャブル”のケビン・コスナーやシヨン・コネリーのような渋い正義に燃える男のようなものだと思いきんでいたということだよ。見たことは？」

「はい」

「いいねえ。ゴホン、だが屈み込んで私の前に近づいたトレンチは正義の味方ではなかった。デ・ニーロのような悪ではないが、その姿は異形で、私は思わず手の平の赤いガラス玉を握りつぶしてしまった。高く伸びた鼻、ヒクヒクと小刻みに動き、すらりと伸びた髭が揺れる。ぎよろりとして鋭い大きな目、その奥で何かが渦巻いているように深い。枯草色の毛がびっしりと生えて、その恐ろしく大きく裂けた口からはじつとりと塗れた唾液と牙が見え隠れしている。時折その隙間から生臭いような重い匂いと、それに面白いことだがコーヒーの匂いとが混ざって漏れているんだ。その鍔広帽の下から覗くトレンチの男の顔は巨大な狼のそれだったのだ」

二宮がふと気がついたように体を起こすと、それまで聞こえてこなかった音が聞こえてくるようだった。シーリングファンが回る音、風で戸が揺れる音、マスターの息づかい、そして自らの心音まで、これまでも聞こえていたのかも知れないが、話しの中に入り込んで身を据えていた二宮にはそれが不思議で、そして新鮮でならなかった。冷めたコーヒーを軽く啜り、マスターのお変わりの問いかけも断って、自身が今こうして話を聞きながらコーヒーを啜っていることを実感した。

「話しは続きますか？」二宮は問いかけた。

「いや、これ以上はあまりはなす事はないよ」そう言ってマスターは灰皿に煙草の灰を落として、その燃える様を見届けた。「その後のことはあまり覚えてはいない。トレンチを着た狼・・・面白いがね、彼は私に一言だけ言っていたよ。鮮明に覚えている。“あいつらのことは俺も気に入らない、貴様のことも気に入らない。貴様はもう戻れない、俺もな。だが俺は戻る、必ず”とね。私はその言葉を聞き届けた後ゆっくりと目を閉じて眠ってしまったよ。次に



目が覚めたときにはこの喫茶店の、ちょうど今、君が座っているその席だった」

二宮は自分の座った席を見て、そしてマスターを見た。

「日は落ちていた。誰もいなくランプが一つついているばかりで、前のマスターはいなかった。トンネルから帰ろうか、とも思ったがもう無理であることも分かっていた。ため息を何度かついて・・・もう一度寝たんだ」

だいぶ日が落ちてきて一日が終わることを二宮は気がついた。そしてマスターの話もまた終わったのだと気がついた。マスターの声は急に年をとったように小さくなり、聞こえなくなっていた。

二宮はカウンターの上面にお金を静かに置くと立ち上がって店を出ようと扉に近づく。すると背後からマスターが声を掛けてきた。

「あの“日と月”のラストでは主人公は自殺をして死んでしまう。

主人公は自殺で最期に死ぬことが解脱だと思っていたからね。全てを終えて自分の役目を全て達成してこの世から去ったんだと、そう考えていた。だが私はそんなものは狂気ではないと思うよ。もし主人公の彼に最期まで生き抜く力があつたのならどうなっていただろうね。彼は作者の、九重亮の心そのものだったのだと私は思う。彼は死ぬ寸前に全うしたのだと考えたのか、それとも狂気に駆られてしまったのか・・・私自身はきつと生き抜いてみせるさ。その方が何より望み深いものだし、人生もずっと楽しいものだよ」

マスターが話し終わるのを確認して、二宮は何も言わずに店を出た。それからボルボのV70に乗り込んでエンジンを掛けてその場を去った。トンネルにさしかかりながら、二宮は“あの言葉”を言ってみようかどうか悩んだ。ただの好奇心からだ。

トンネルのライトの下を通りながら思う。記者は好奇心と文字で生きるもの。

ハンドルをきつく握って、トンネルの向こうの暗闇へとボルボは消えていった。



## その六（後書き）

「帰り道」了いです。

テレビや雑誌を読んでいると信じられないような体験をしている人が沢山いらっしやっつて、それを見ると私はいつも羨ましくて仕方がありません。それが本当かどうかは別として、ね。

果たしてマスターの話は本当の体験談なのでしょうか、それとも作り物でしょうか。それが分かるのは、あの言葉をいえる勇氣のある人だけです。主人公の宗吾は少なくともマスターの話信じていたようでしたが・・・

会話だけの、特別なものが何も出てこない静かな恐怖に挑戦してみました。

感想を聞かせてもらえたら嬉しいな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6023j/>

---

帰り道

2010年10月8日12時38分発行